

イタイイタイ病資料館における小・中・高・大学生の学習の状況

—開館後5年間のまとめ—

富山県立イタイイタイ病資料館 鏡 森 定 信

I. はじめに

イタイイタイ病（イ病）資料館は、三井金属鉱業神岡鉱業所から排出されたカドミウム（Cd）の汚染地域のほぼ東端の富山市新保地区で平成24年4月29日に開館した。その役割の一つは、将来を担う学童、具体には公害について学ぶ小学5年生にフォーカスを置いて、本県で起きた公害によるイ病について学びの場を提供することである。開館後3年間の主に小学5年生を中心とした学童の学習状況はすでに報告した¹⁾。今回は、来館者が漸増している小学校、中学校、高校そして専門学校などを含む大学（以下、大学等）の学習状況を開館後5年目の時点でまとめ、検討したので報告する。

イ病資料館での見学コースは、(1) Cd 汚染の被害発生から今日までの状況を約15分のDVDにまとめたガイダンス映像（於2階交流学習ルーム）、(2) 1階のジオラマなどの視聴覚教材で構成された①～⑤の展示コーナー：①神岡鉱山からのCd汚染が始まった当時の農村の生活（汚染された神通川から取り入れた農業用水を水田に引き込んでいただけでなく、炊事・飲用に用いていた明治の終わりから昭和のはじめの暮らし）、②イ病被害者の悲惨な状況（自宅で長年寝たきりと骨折の痛みで苦しんだ被害者と介護する家族）、③提訴から勝訴までの裁判の紹介（敗訴したら村を出る覚悟で行った戸籍をかけた活動、判決直後に三井金属との団体交渉で取り交わした2つの誓約書と1つの協定書）、④原因究明と救済制度（骨や腎臓障害の解説、イ病患者認定制度の紹介な

ど）、⑤被害者団体の神岡鉱山への毎年の立ち入り調査と莫大な費用を要した33年間にわたる汚染土壌復元事業、の5つのコーナー、(3) イ病被害者の介護や訴訟に関わった経験者の語り部講話（於2階交流学習ルーム）からなっている。

特に小学生には、興味と理解を促すためにジオラマや主要な展示の音声ガイド、展示に関するワークシートなどを取り入れ、工夫を行っている。通常、小学校の利用では、公害の学習が行われる5年生の学校単位での来館が主要な部分を占めている。中学校では、社会（歴史・公民、地理）との関連で1～2年生の学年やクラス単位での来館が多い。

また、高校では、現代社会の政治・経済でイ病を学ぶが、来館者は学校単位よりは専攻科や部活など特定の目的を持った小グループでの利用が主である。大学等では、セミナー単位で少人数での来館が多い。

通常は、まず(1)のガイダンス映像を視聴し、次いで(2)の展示について解説員の説明（学校対象では一般の60分より短く通常45分）を受け、最後に(3)の語り部講話を聴いて感想文を書いて終了する合計90分余りのコースを推奨モデルとしている。

県内の小中学校に対しては、校長会には学習メニューや無料送迎バスの紹介などの情報提供、また5年生にはイ病を解説した副読本²⁾（よみがえった美しい水と豊かな大地）を毎年全員に配布している。県下の中学1年生には平成28年度から全員に副読本³⁾を配布している。また、広報

に加え、学校に出向いて来館の勧誘を行っている。

なお、夏休みには、資料館で語り部さんなどの話を聴きながら学ぶ自由研究講座「イ病を学ぼう」や元汚染田や神岡鉱山の見学を取り入れた「イ病を学ぶ日帰りバスツアー」を学童と保護者を対象に行っている。また、教員を対象に年一回、イ病に関する教育について研修会を行っている。教員の皆さんの手によるイ病を教材としたモデル授業など自主的な取り組みも始まっている。

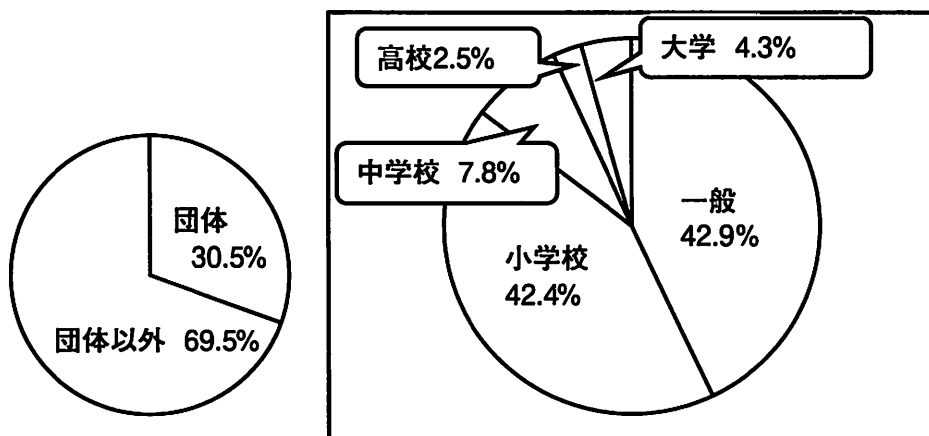
昭和51年5月には被害者団体によって「清流会館」が設立されており、また平成26年の7月には市民団体によって「イタイイタイ病を語り継ぐ会」が発足し、現在、イ病に関する情報は県内では主にこれらの3機関から発信されている。

Ⅱ. 来館数の状況

ここ5年間（平成29年3月31日現在）の資料館来館者の概況を図1に開館後3年間（平成27年3月31日現在）のそれと合わせて示した。全来館者155,006人のうち10人以上の団体来館者数は47,236人（全体の30.5%）であり、開館後3年間の28.4%と比較してその占める割合は微増している。またこの団体の構成をみると、学校が占める割合は団体全体の57.1%で開館後3年間の50.1%より増加しており、それは主に小学校と中学校の増加によるものであった。

これらについてももう少し詳細なデータを以下に示す。開館以来5年間に団体として来館した学校別の内訳は、主に5年生からなる小学校では341校（20,050人；全団体来館者数47,236人

開館後5年間の来館者の状況（左；全体の構成、右；団体の内訳）



開館後3年間の来館者の状況（左；全体の構成、右；団体の内訳）

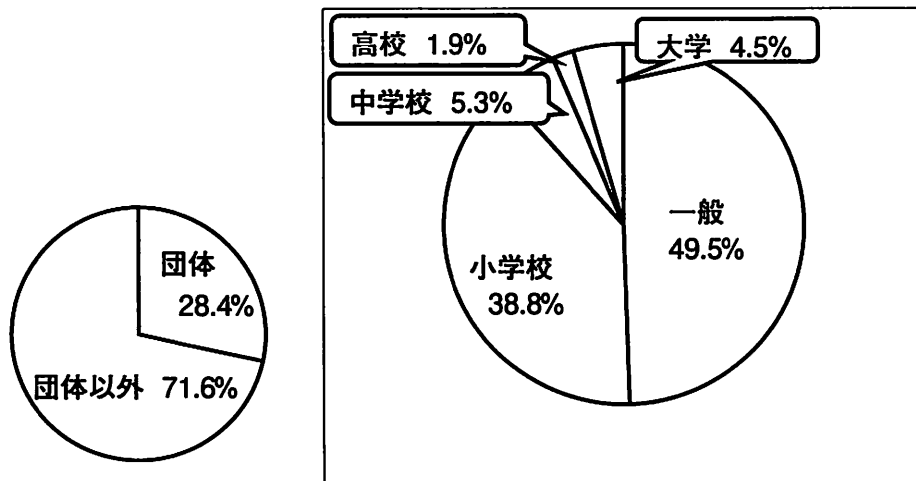


図1. 来館者の状況

の42.4%)と最も多く、次いで中学校では100校(3,681人;7.8%),大学等では67校(2,033人;4.3%),最も少ない高校では34校(1,176人;2.5%),であった。団体来館数の構成では、小学校からの来館者数が、学校以外の団体来館者数(10人以上を団体としている)とほぼ同じになっている。ちなみに開館後3年間のそれでは、学校以外の団体の来館者数が小学校からの来館者数より10%余り多かったので、この変化は主に小学校からの来館者数の増加によるものであった。

この小学校からの来館の状況を経年的にみると、平成24年度は50小学校(3,016人)、25年度は67校(4,158人)、26年度は67校(3,761人)、27年度は75校(4,572人)、28年度は82校(4,543人)で、年度を追うごとに学校数が増加していた。28年度現在で県下の小学校数は188校、児童数は52,680人なので、28年度は全小学校の43.6%、全児童数の8.6%が来館したことになる。

開館後3年間のまとめで、県下の小学校のおおよそ半数がイ病資料館に一回は来館していたと報告した¹⁾。開館後5年間ではそれが70%を超えており、行政区別では資料館から遠くなるほど来館率が低くなる傾向がうかがえる。小学校の来館率は資料館のある富山市が最高で、市内の未来館校は平成29年3月末で5年生が数名の小規模の2校のみとなっている。

中学校では、それぞれ8校(220人)、15校(708

人)、14校(569人)、22校(4,572人)、14校(823人)であり、増加傾向になったとはまだ言えない。28年度現在で県下の中学校数は81校、生徒数は28,834人なので、28年度は全中学校の17.3%、全生徒数の2.9%が来館したことになる。団体来館者には語り部講話を聞いた後に感想文をお願いしており、小学生の来館者の感想文ではイ病について“学習をもっと深めたい”との意見も多く、中学校からの来館も目に付くようになってきたことから、平成28年度には、中学生用のイ病の副読本を、教育委員会やイ病対策協議会などの関係機関・組織の協力を得ながら、現場の教員の編集執筆により作成した。中学校でのイ病の学びが、この副読本を介して深まることを願っている。

Ⅲ. 学習の状況

1. 来館前後の知識の変化の比較

資料館としては、学校に対して事前学習をして来館して欲しいと希望している。しかしながら多忙を極める学校現場でそのような時間を持つことは大変困難である。そこで、例えば、小学5年生に配布した副読本などによる自学の機会を提供してきた。また、近年は「イタイイタイ病を語り継ぐ会」の活動、あるいは河陸下やG7環境大臣の来館などでイ病がマスコミに取り上げられる機会も増えており、発生時期や症状など基本的な予備

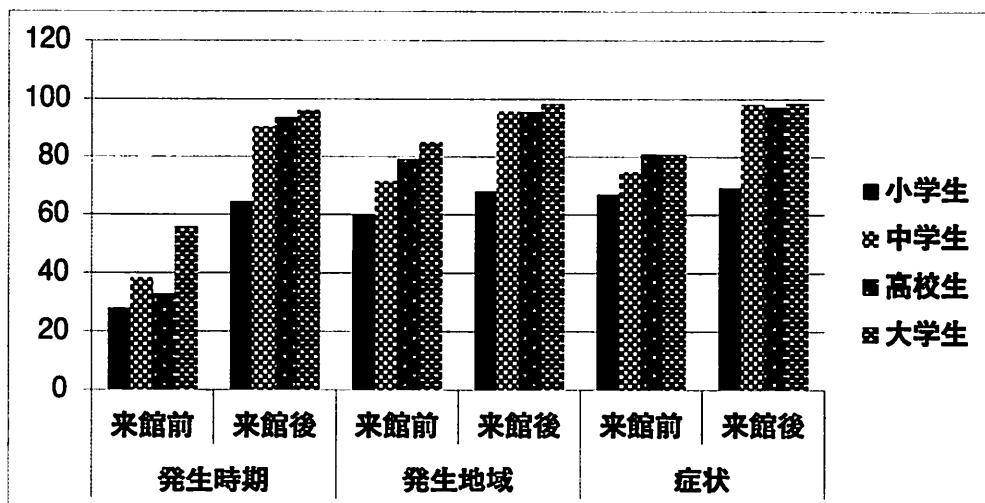


図2. 各事項の“知っている”と答えた割合の来館前後の変化

知識も増加する状況にあるように思える。

この状況をみる指標として利用可能なのは、団体来館者のアンケートの中で来館前と後の学習状況を尋ねている、「発生した時期」、「発生した地域」、「患者の症状や特徴」、「原因（物質）」の4項目である。それぞれについて、来館前の小学生における“知っている”の開館後5年間の各年度の割合をみると、「発生した時期」では20～50%、「発生した地域」では50～80%、「患者の症状や特徴」では60～80%、「原因（物質）」では40～70%の範囲で変動しており、その割合が年々増加する傾向にはなく、むしろ初年度（平生24年度）が、それぞれ47%、78%、78%、71%と最高であった。これにはイ病の教育に熱心な教諭の介在が反映されていると考えられる。また、いずれの年度においても、「発生した時期」において“知っている”の割合が一番低かった。「イタイタイ病を語り継ぐ会」が、独自に行った教科書調査でイ病の発生時期がバラバラな記載になっており、訂正を求めた行動⁴⁾はこのような状況からも意義が大きい。

図2.には、この4項目の“知っている”の割合を来館前後で比較して示した。全体を通じて小学生の「発生した時期」を来館前に“知っていた”と回答した者の割合が最低で27.9%であった。これは、来館後に64.3%と2倍以上に増加し学習効果が最も大きかった項目である。しかしながら、来館後の項目別、学校別のいずれにおいてもその割合は最低で、「発生時期」は、最も学習を深める必要のある課題である。

2. 来館による学習効果の状況

小学生の来館による学習効果を前述したアンケート調査から推測した。図3の1～3にその概要を示した。「患者の腎臓の状態」、「患者の骨の状態」ならびに「患者の認定法」の学習効果については、年度別に特に差異はみられなかったため、開館後5年間をまとめて図3の1に示した。「患者の骨の状態」についての“理解できた”（70%）と“特に印象に残った”（以降は“特に印象的”

と表現）（32%）が他の2項目に比較してより高値を示した。イ病は骨被害を主体としており、また骨粗しょう症の大腿骨模型を置き、正常骨と比較できるように展示が工夫されているので、理解や印象に影響したものと思われる。両陛下もこの模型にはご興味を覚えられ、実際に手に取られ両者を比較しその重さの違いに驚いておられた。一方、“もっと学習したい”は15%で、「患者の腎臓の状態」の16%より僅かに低かった。イ病の本体が腎臓にあることから、今後の学習の必要性を感じた結果と思われる。小学生の学習事項としてやや難解かと思われる「患者の認定法」については、具体的に展示コーナーでその4条件を示し説明を加えていることから、「患者の骨の状態」とほぼ同程度の学習効果であった。

「裁判」、「立ち入り調査」ならびに「土壌復元」の学習効果についても、年度別に特に差異はみられなかったため、開館後5年間をまとめて図3の2に示した。「裁判」についての“理解できた”（63%）と“特に印象的”（15%）が他の2項目に比較してより高値を示した。一方、“もっと学習したい”は12%で、「立ち入り調査」の20%や「土壌復元」の21%より低かった。立ち入り調査も土壌復元も今後につながる課題を抱えており、継続的な学習が望まれる事項なので今後に期待したい。

総合的な事項として、「被害者の苦しみ苦労」と「環境と健康の理解」をアンケートで尋ねている。これについても年度別に特に差異はみられなかったため、開館後5年間をまとめて図3の3に示した。「環境と健康の理解」で、“理解できた”（70%），“特に印象的”（32%），“もっと学習したい”（24%）のそれぞれが、「被害者の苦しみ苦労」より高値を示した。「被害者の苦しみ苦労」で“理解できた”の割合も69%と高いので、イ病の学習を踏まえた上で、広く環境問題に目が向いたものと思われる。実際の感想文でも「イ病に限らず環境についてもっと勉強したい」、「家族あるいは友達を連れてまた来たい」、「環境を大切に、まず自分でできることから始めたい」など、今後

図3-1

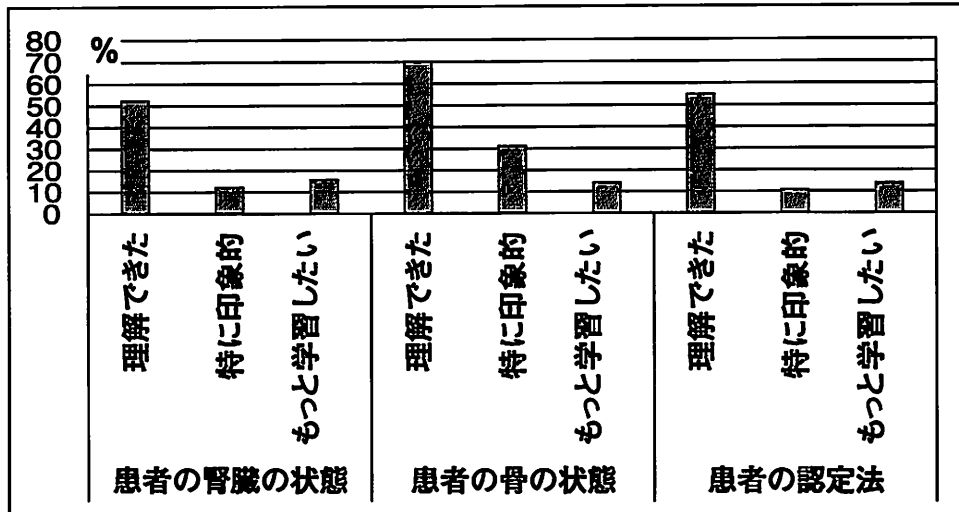


図3-2

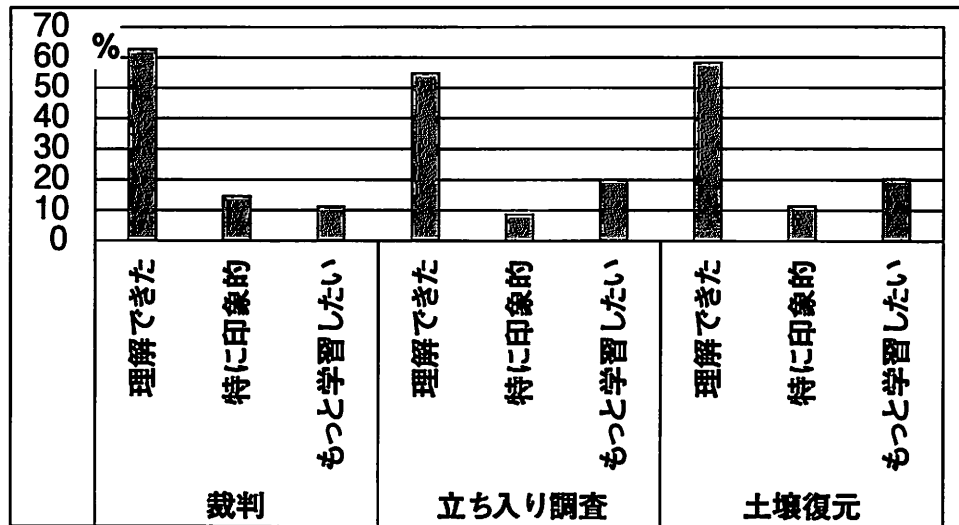


図3-3

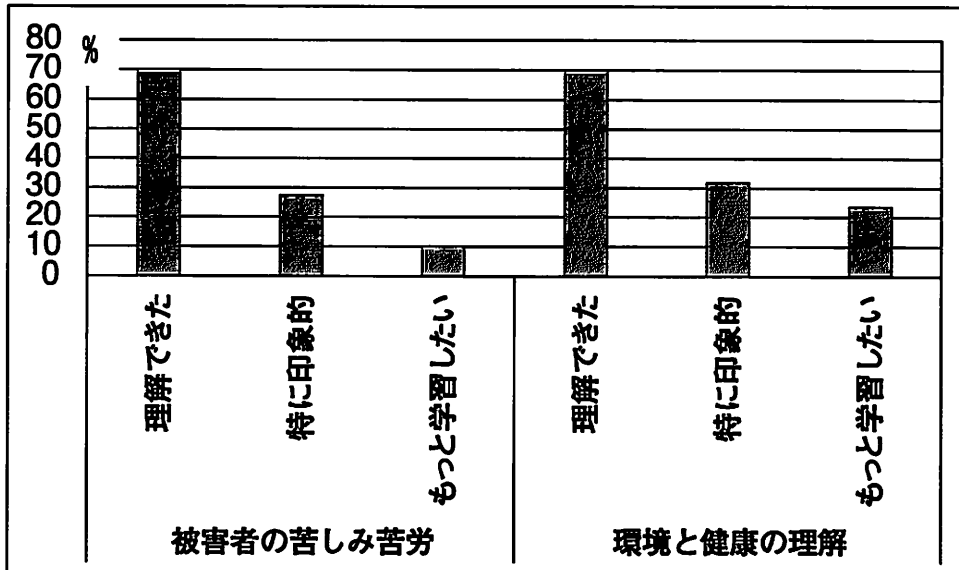


図3. 小学生の各事項の学習効果 (上から図3-1, 2, 3)

図4-1

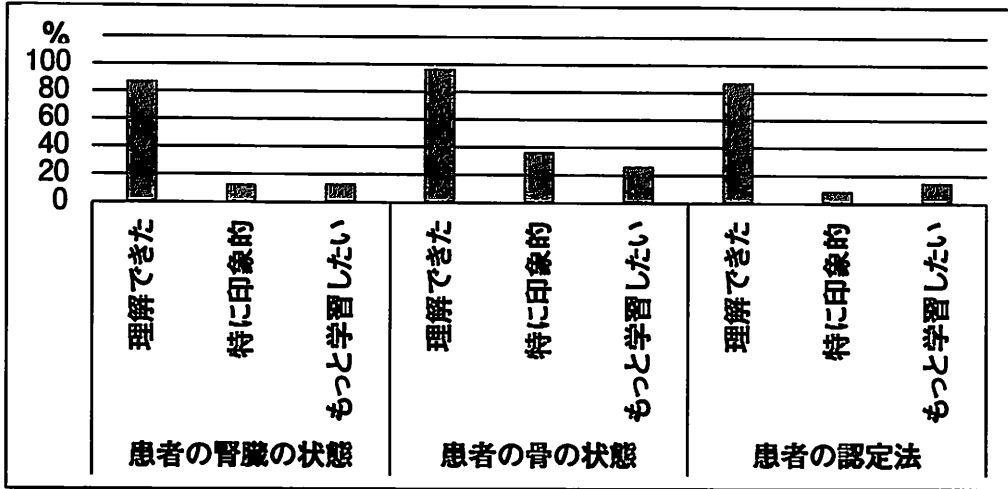


図4-2

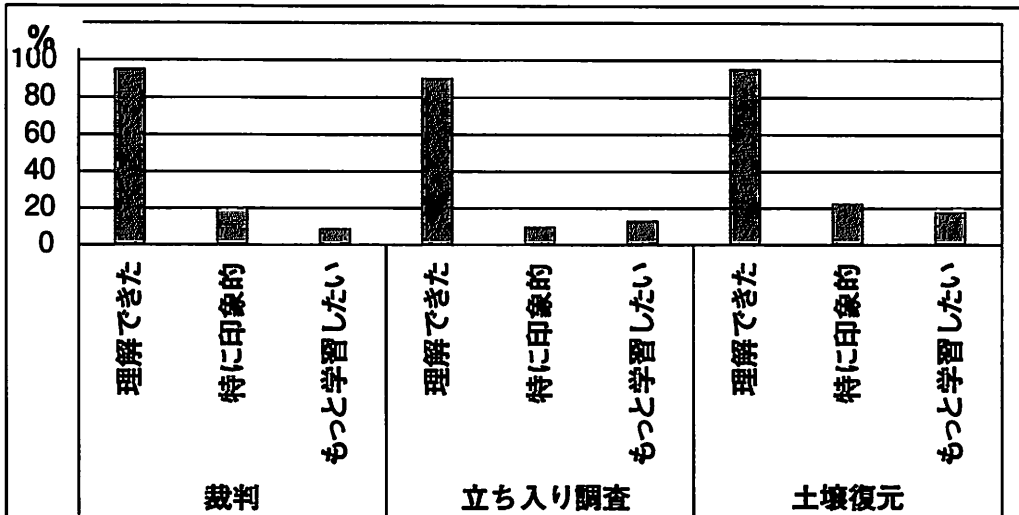


図4-3

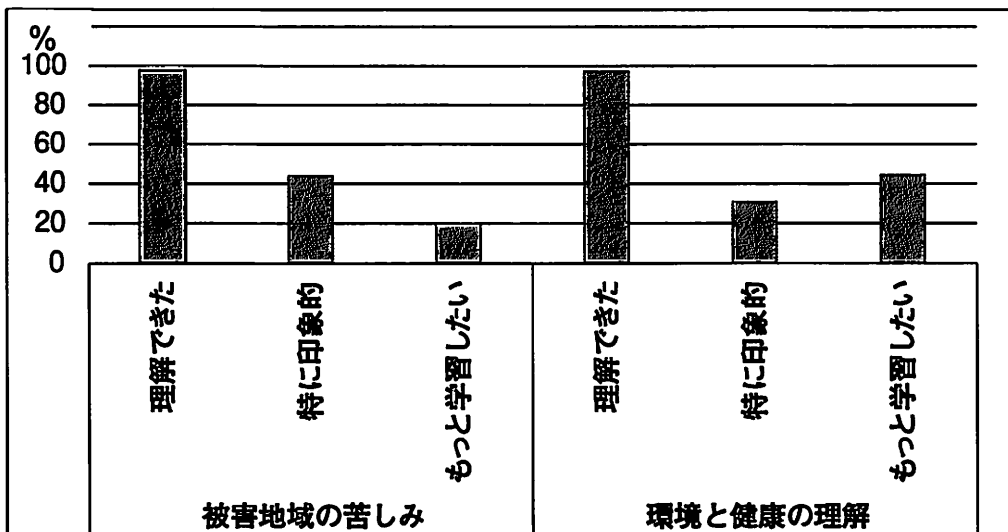


図4. 大学生等の各事項の学習効果 (上から図4-1, 2, 3)

の学習や行動に関わる感想文が全体の3割程度にみられる。そのうち来館者等に広く知らせたいものを選んで資料館内の電子掲示板で流している。

中学生、高校生、大学生等についても同様にアンケート調査を整理した。学年が進むにつれて、いずれの項目においても、“理解できた”の割合が増加した。大学生等のそれを図4の1~3に示した。“理解できた”はいずれも90%を超え100%に近づいている。一方、“特に印象的”、“もっと学習したい”、をみると、「環境と健康の理解」の“もっと学習したい”で45%と大きな値を示した以外は、他の学校と大きな差異はみられなかった。知識的理解は学年が進むにともない伸びるが、情緒的（感性）反応は、学年の進行と比例していない。これには、学年差以上にそれぞれの生活史や個人の感性が関与しているのかもしれない。いずれにしても、知識の獲得とともに資料館来館により“特に印象的”との回答が、全項目、全学校を俯瞰して10~40%であり、資料館を訪れたことの意義を示すものと考えている。

心に響く学習は一生に影響が及ぶ。「語り部講話」を聴講した後の学童で、その悲惨さに涙ぐみ共感する学童を多く見てきた。もちろんこれは一般来館者においても同様であった。イ病資料館が来館者の環境観のみならず人生観に情緒的な面からも影響を及ぼす学びの場としての役割を果たしているものと考えたい。

Ⅳ. 終わりに

「イ病のような悲惨な被害を再び繰り返してはならない」の思いを軸に、被害者団体と原因企業の協力を得ながら県立の資料館が平成24年4月に開館した。イ病からの学びを広め、深めるためにいろいろな取り組みを展開してきた。

史実をしっかりと伝承することを基本としながら、それが単なる知識にとどまらず、実相に深く根ざした共感的理解、そして未来志向につながる取り組みが一層求められている。折りに触れ資料館の活動をまとめて振り返り、今後の資料館の活動を展望する一助になるべく本稿をまとめた。

開館後5年間を振り返り、小学校5年生を中心にその来館者数が伸びており、学習の効果も上がっていることを報告した。このような資料館からの情報提供もその役割の一つとして重要であると思慮している。

文献

1. 鏡森定信. イ病資料館における小学生の学習状況. 第32回富山県農村医学研究および健康管理活動発表集会. 平成27年3月7日, 厚生連高岡病院地域医療研修センター.
2. 富山県. よみがえった美しい水と豊かな大地－イタイイタイ病に学ぶ－(改訂版). 2017. 4.
3. 富山県. 蘇った豊かな水と大地－イタイイタイ病に学ぶ－. 2017. 3.
4. イタイイタイ病を語り継ぐ会. イ病教科書の誤り指摘. 富山新聞, 平成28年11月24日.